

母性看護学実習の施設別にみた学生の母性看護技術経験の検討

木下 照子*・谷野 宏美

看護学科

(2010年11月17日受理)

本研究は、母性看護学実習における学生の実習施設別による母性看護技術の経験状況を明らかにし、今後の母性看護学の学内演習や母性看護学実習の学習効果をあげるための資料とする。

学生が、母性看護学実習時に、経験した項目をチェックリストに記載した物を集計した。その結果、各施設で実施した主な項目は、妊娠期では妊婦健診時の子宮底長の測定61.4%、検尿47.4%であり、見学では超音波検査78.9%であった。分娩期では胎盤・臍帯の計測71.9%、産褥期では子宮の収縮、乳房の観察は80%以上であった。新生児期では体温、心拍、呼吸の測定はどの施設においても全員が実施しており、さらにおむつ交換、衣服着脱、抱き方寝かせ方など80%以上の実施であった。各実習施設において実施・見学項目の差は見られるが、産褥期、新生児期においては各施設とも共通した項目が実施できていることが明らかであった。

(キーワード) 母性看護学実習、母性看護技術、臨地実習

はじめに

本学の母性看護学実習は、全領域実習のローテーションに組み込まれ、4施設に別れて実習を行っている。したがって、5月実習開始から11月実終了までに1グループ8名を4名ずつ2施設において同時に実習を行っている。臨地実習は学生が学内で学習した知識・技術・態度の統合をし、看護実践能力の基本を習得するために不可欠なものである。また学生は臨地実習において看護の実践を経験し、確実な看護への道を夢から現実へと繋げる機会でもあり大きな意気込みと期待をもって臨んでいる。しかし、母性看護学実習では患者の権利の擁護や低出生率に伴い、看護技術体験の機会も少なくなってきた。母性看護学実習施設の受け入れは非常に厳しいものであり、実習施設を分散せざるを得ない状況にある。施設側からの実習体制の希望や学校の教育計画には少しの隔たりがみられる状況であるが、どの施設においても実習効果が得られるように臨床指導者・実習担当教員は実習に向けて努力している。しかし、実習施設の実習体制や分娩数により看護技術経験項目に違いがあることは予測された。そこで、それぞれの施設において学生の7割が実践または見学している技術項目を経験状況とし検討した。

本報告は、実習施設別に7割以上の学生が実施または見学した母性看護技術項目について経験状況を明らかにし、今後の学内実習や母性看護学実習の学習効果をあげるための資料とする。

I. 研究目的

母性看護学実習における学生の実習施設別による母性看護技術の経験状況を明らかにする。

II. 研究方法

母性看護学実習を終えた看護学生に母性看護学実習における看護技術の経験状況について質問紙により調査を行った。

1. 調査対象：A短期大学看護科3年生
2. 調査期間：2010年2月
3. 調査内容：母性看護学看護技術経験
妊娠期技術16項目、分娩期12項目、産褥期11項目、新生児31項目、その他3項目の全体で73項目とした。
4. 集計方法：全体集計及び項目別単純集計
5. 倫理的配慮：学生に実習経験録を用いる調査の趣旨および倫理的配慮について文章及び口頭にて以下の通り説明した。実習評価は終了しており、その他の評価にも影響しない。回答は無記名であるがどこの施設での実習であったかについて明らかにする(施設名は匿名表示する)。個人が特定されることはない。実習経験録の提出を持って同意が得られたとする。さらに提出後であっても取り消し可能であることを付加した。

*連絡先：木下照子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

Ⅲ. 実習方法

母性看護学実習は2単位90時間を2週間で実施している。実習場所は総合病院、中規模病院、クリニック等であり、実習環境はそれぞれに違いがある。実習では可能な限り褥婦と新生児を受け持つことができるよう臨床指導者に調整を依頼している。また各施設ごとに学生間での引継ぎも行われ事前学習に活用している。

実習前のオリエンテーションと臨地実習の1週目の最終日と臨地実習終了後には、各施設での学びを共有するために学習体験や事例報告会などを合同で行う。事例検討や保健指導の実際について貴重な経験を報告している。実習施設配置については図1に示すとおり、常に2か所の施設で同時進行している。

実習施設A Bは郡部、C Dは都市部に位置している。

Ⅳ. 結果

母性看護学実習終了後の学生66名の経験録は、回収数57、回収率86%であった。

1. 各実習施設（以下施設とする）による技術項目を、それぞれの施設において7割以上の実施及び見学の状況を表した（図2）。全技術73項目の実施・見学が7割以上あったものはA施設で28.8%、B施設で24.7%、C施設27.4%、D施設では34.2%であった。

妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の各期でみると①妊娠期16項目から見ると実施・見学は2～3項目であるがB施設では実施はなく見学4項目であった。②分娩期ではA施設で実施1項目・D施設でも実施1項目、見学4項目であった。③産褥期ではどの施設においても2～3項目があり、見学においてもB施設を除いて1～3項目がある。④新生児期においてはいずれの施設でも実施・見学ができていた（図3）。

2. 妊娠期の全体では妊婦健康診査（以下妊婦健診）時の子宮底長の測定61.4%、検尿47.4%であるが施設により差がみられた。また見学では超音波検査78.9%であった。分娩期では胎盤・臍帯の計測71.9%、産褥期では子宮の収縮、乳房の観察は80%以上であり、新生児期では体温、心拍、呼吸の測定はどの施設においても全員が実施し、おむつ交換、衣服着脱、抱き方寝かせ方など80%以上の実施であった。

A施設での7割以上の技術項目は3項目（子宮底長の測定、血圧測定、検尿）の実施と2項目（問診、超音波検査）の見学であった（図4）。B施設では2項目（子宮底長の測定、腹囲測定）の実施であり見学も2項目（問診、内診）であった（図5）。C施設では3項目（子宮底長の測定、腹囲測定、血圧測定）の実施と2項目（超音波検査、個人指導）の見学であった（図6）。D施設では2項目（レオポルド診断、子宮底長の測定）の実施と3項目（問診、超音波検査、個人指導）の見学であった（図7）。

全体の経験では実施は16技術項目中5項目（子宮底長、腹囲測定、血圧測定、検尿、レオポルド触診）でありこれは妊婦健診に関する項目であった。「検尿」はA施設のみが96.4%であるが他施設では実施していなかった。技術見学では4項目（問診、内診、超音波検査、個人指導）であった。超音波検査についてはどの施設においても見学できているがB施設では7割にみたなかった。

3. 分娩期においてはA施設・D施設において12技術項目中1項目のみ、胎盤計測（図8・図9）であったが、B施設60%・C施設57.1%とそれぞれに経験していた。見学においては12技術項目中4項目（分娩第2期、分娩第3期、分娩第4期、経膈分娩の立会い）をD施設で行っていた。B施設・C施設とも7割を超える実施や見学はなかった。

4. 産褥期においてA施設では2項目（子宮収縮、乳房の観察）の実施と見学2項目（授乳、退院指導）であった（図10）。B施設ではA施設と同様の2項目（子宮収縮、乳房の観察）の実施であったが、見学項目は見られなかった（図11）。C施設では2項目（子宮収縮、子宮底の測定）の実施と1項目（授乳）の見学であった（図12）。D施設では3項目（子宮収縮、子宮底の測定、乳房の観察）の実施と3項目（乳房マッサージ、授乳、退院指導）の見学であった（図13）。

5. 新生児期において全体では実施は34技術項目中11項目（体温の観察、心音の観察、呼吸の観察、衣服着脱、おむつ交換、抱き方寝かせ方、哺乳瓶での授乳、排気、沐浴、黄疸の観察、スタンダードプリコーション）であった。また見学においては34技術項目中10項目（おむつ交換、抱き方寝かせ方、聴覚スクリーニング、児の採血、直接母乳、沐浴、清拭、身長計測、体重測定、黄疸の観察）であった。これらのうち実施、見学と重複しているものはおむつ交換、抱き方寝かせ方、沐浴、黄疸の観察の4項目であった。A施設では9項目の実施と3項目の見学であった（図14）。B施設では11項目の実施であり見学は2項目であった（図15）。C施設では9項目の実施と3項目の見学であった（図16）。D施設では3項目の実施と5項目の見学であった（図17）。

Ⅴ. 考察

1. 各実習施設において7割以上の実施及び見学状況は、施設によって違いが見られた。全技術73項目の34.2%を学生の7割以上が経験していた。D施設では、妊娠期から新生児期まで多くの項目が実施・見学できている。技術1項目が7割以上できるということはその技術に関連および付随した技術も実施・見学できているということが窺えた。これらは実習対象である妊婦・産婦・褥婦・新生児の一連の過程にあるものであり、実習期間中に妊産褥婦の協力で看護技術が実施でき見学の機会に恵まれたものといえる。

2. 妊娠期に関する技術経験項目について

妊婦への技術項目は主に外来実習で妊婦の健康診査時に経験することが多い。病棟実習でも入院中の妊婦に関わることもあるが、多くは外来実習においてである。各施設共に実施・見学できている妊婦の健康診査時には、「子宮底の測定」「腹囲測定」「血圧測定」がある。これらは直接妊婦の肌に接触することであり、肌を通して感じる経験を生かして受け止めてほしい。超音波検査においても施設平均78.9%が見学できているが、医療機器への関心や妊産婦の思い、医師と妊産婦とのかかわりを観察することができる機会である。また、個人指導の見学は全施設では56.1%であるが約半数以上の学生はこの指導を通じて妊娠中の健康について学んでいる。学生は妊婦に胎児のことを意識した生活行動が必要であると考え、妊婦としての自覚について観察をしている。妊婦に必要な測定や診察結果から状況を判断し適切な保健指導までの流れを学習することができている。これらはいずれの施設においても実習することができている。また、A施設とC施設においての実施、見学項目数は同様であり、項目内容がA施設は検尿でC施設は腹囲測定であるがいずれも妊婦健診項目である。またこれらに関連した技術も学習できたものと考えられる。

3. 分娩期に関する技術経験項目について

分娩（経膈分娩）の立会いは全体では38.6%であるが、D施設では71.4%、C施設では42.9%、B施設では40%、A施設では28.6%である。しかしA施設では帝王切開の見学が60.7%ある。このように施設の特殊性もあり学生の経験に違いがある。分娩の立会いで見るとD施設では分娩第2期から第4期までの見学も多く、実習には望ましいといえる。しかし、A施設では帝王切開の見学もあり、今後帝王切開分娩が増加されることを考えるとA施設での実習も意義がある。また母性看護学実習が分娩の立会いにこだわらなければ、C施設、B施設においても実習は可能である。分娩を通して学ぶことも必要であるが第1期の看護経験が少ないのが残念である。しかし、胎盤及びその付属物の計測観察は全施設で実施できている。これらを観察することで妊娠・分娩の生理的理解、妊娠の経過を思い起こし、胎児と母親の関連、児への思い、母親への思いを想像し学生一人ひとりが計測し観察することは貴重な経験である。

4. 産褥期に関する技術経験項目について

産褥期においてはいずれの施設においても7割以上の実施や見学が多くあるように、ほぼ全員の学生が産褥期にある女性に関わることができている。褥婦は入院期間が5日から6日までの期間がほとんどであり、実習中の学生にも関われる機会が多い。実習期間も限られているが、それでも2～3日の間に実施や見学ができている。褥婦の身体的変化や母子関係など、受け持ち対象に限らず、褥婦の許可を得て、部分的に学習することもできる期間である。これらはどの施設においても、臨床指導者や教員の指導のもと

に多くの技術項目を経験できる期である。

5. 新生児期に関する技術経験項目について

新生児に関する経験は実施・見学において、どの実習施設でもできている。施設により項目の違いはあるものの児への関わりは全員の学生ができている。これは貴重な経験であり、児に関わることで実習を楽しく、またやる気や意欲を誘うものでもある。

橋本¹⁾らは母性看護学実習において環境に左右されやすい新生児に対して、多くの看護学校で沐浴、哺乳瓶による授乳など直接多岐にわたる技術を実施していることを報告している。このように本調査では、新生児に関する技術34項目をあげているが、氏平ら²⁾も沐浴、抱き方寝かせ方などの場合事故が起こりやすいことを指摘しているように項目や回数のみこだわることなく安全に正確な技術ができることを大切にしていきたい。

6. 各実習施設において学習効果を高めるための課題

実習施設においては、学生全員が同様に看護の対象者から経験項目を全て実施することは不可能である。したがって学生個人の経験をありのままに表現し他の学生と共有することが必要である。それには伝達する能力が必要である。見たまま、経験したままを伝えるには何を見て、何が経験できたのかが理解できることであり、そしてどの方法で伝えたらよいかの確に伝わるかである。また、受ける側にとっても何を提供されているのか理解できる事前学習が必要である。単にカンファレンスが報告会に終わることがないように教員のかかわりが必要である。

看護に必要な技術であることや技術のイメージができるよう学内での学習を強化することが必要である。さらに実習で実施・見学している項目については学内での効果的な学習指導が必要であり、学習方法の検討も必要である。

終わりに

看護実践の場で妊婦・産婦・褥婦の状況に沿った看護技術の提供ができるよう、技術教育を行い実習施設の特徴を活かし、効果的な実習を目指し今後も検討していきたい。また実習の場における看護技術がどの程度実践でき、実践可能であるかについて、臨床指導者と技術項目の共通枠組みを活用できるよう提案していきたい。

今回の調査においては、実際に実施や見学しているにも関わらず、記録していない項目もあり、実施・見学項目が学生自ら整理できる方法について意図的に関わる必要もある。

謝辞

調査に協力してくださった学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 1) 橋本智恵美, 氏平美智子, 行光美音子他: 母性看護学臨地実習における医療事故に対する認識及び予防教育の実態調査. 第32回日本看護学会論文集看護教育, 188-190, 2002.
- 2) 氏平美智子, 行光美音子, 木下照子: 母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハット体験から考える事故予防教育. 第36回日本看護学会論文集看護教育, 137-139, 2005.
- 3) 成田恵美子, 渡邊竹美, 糠塚亜紀子他2名: 母性看護

学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査. 秋田大学医学部保健学科紀要, 15巻1号, 58-67, 2007.

- 4) 大林陽子: 母性看護学における看護学生の疑似妊婦体験の学習効果の検討, 第39回日本看護学会論文集看護教育, 6-8, 2008.
- 5) 松井里美, 名村かよみ, 柳原典枝他: 新卒時に身につけておくべき看護技術レベルならびに新卒時の看護技術到達レベルの実際 - 新卒者自身の認識と臨床側の認識の比較 -. 日本赤十字看護学会誌, Vol. 8, No. 1, 43-50, 2008.

図一覽

施設	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
A							
B							
C							
D							

図1 母性看護学実習の施設配置

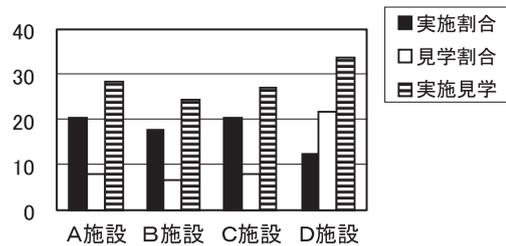


図2 施設別技術経験割合

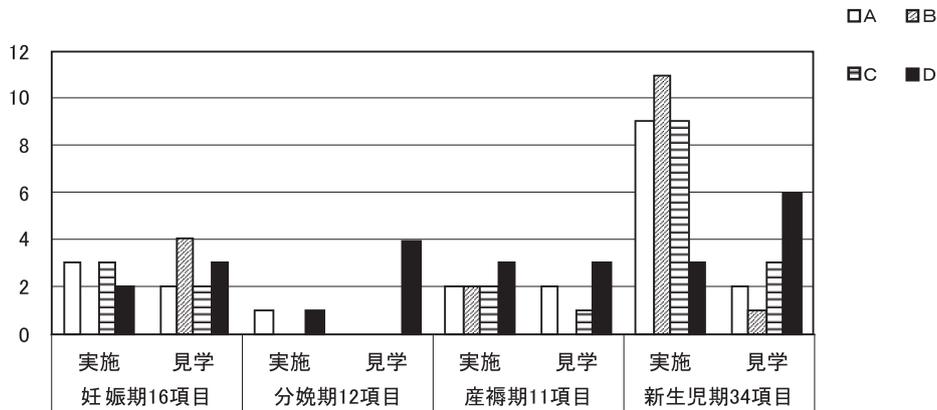


図3 各期における施設別実施・見学技術項目

母性看護学実習の施設別にみた学生の母性看護技術経験の検討

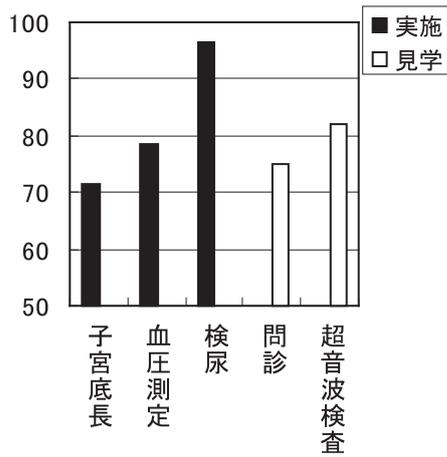


図4 A施設における妊娠期に関する技術項目

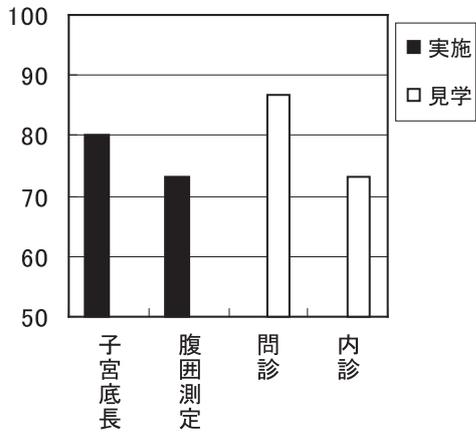


図5 B施設における妊娠期に関する技術項目

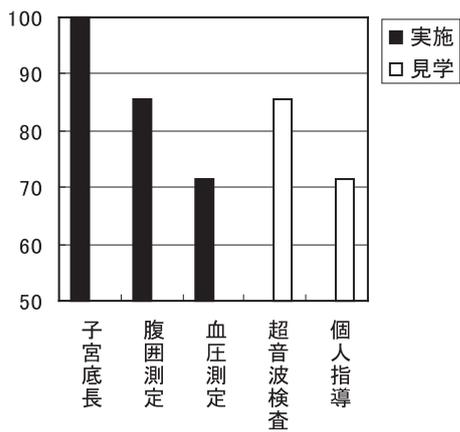


図6 C施設における妊娠期に関する技術項目

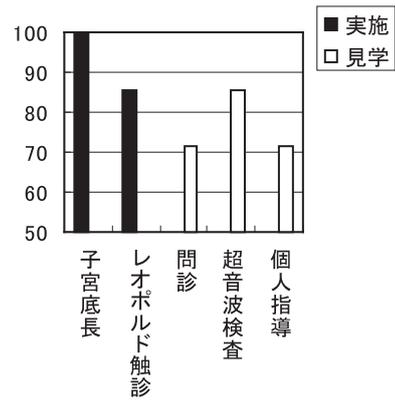


図7 D施設における妊娠期に関する技術項目

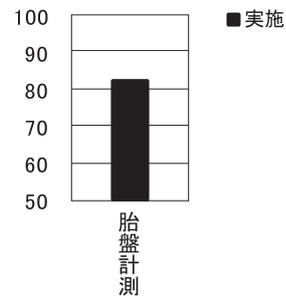


図8 A施設における分娩に関する技術項目

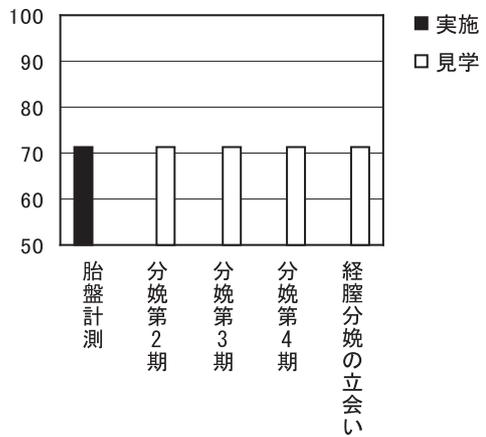


図9 D施設における分娩に関する技術項目

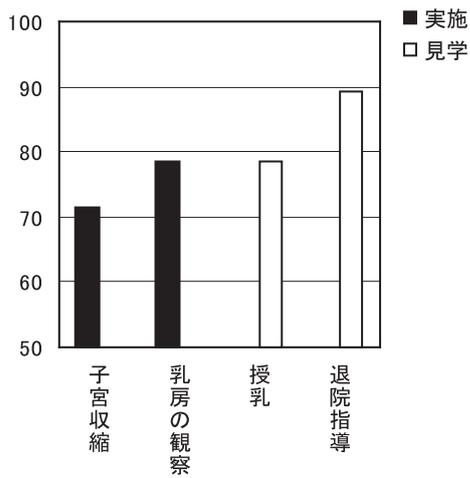


図10 A施設における産褥に関する技術項目

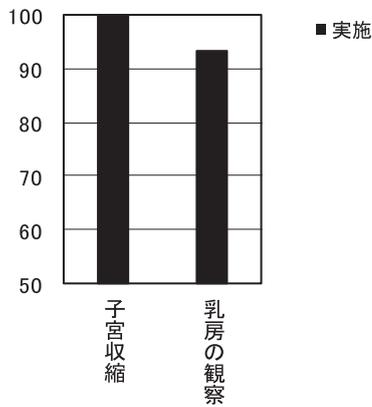


図11 B施設における産褥に関する技術項目

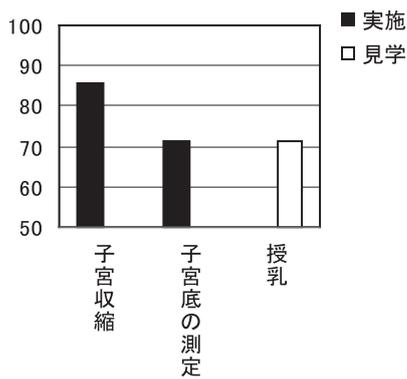


図12 C施設における産褥に関する技術項目

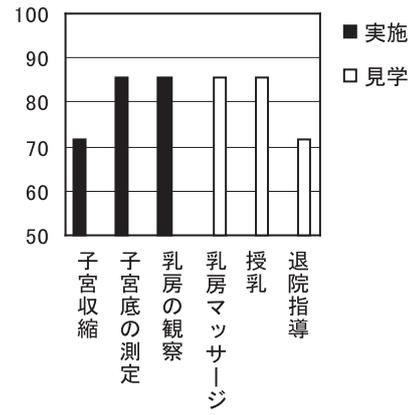


図13 D施設における産褥に関する技術項目

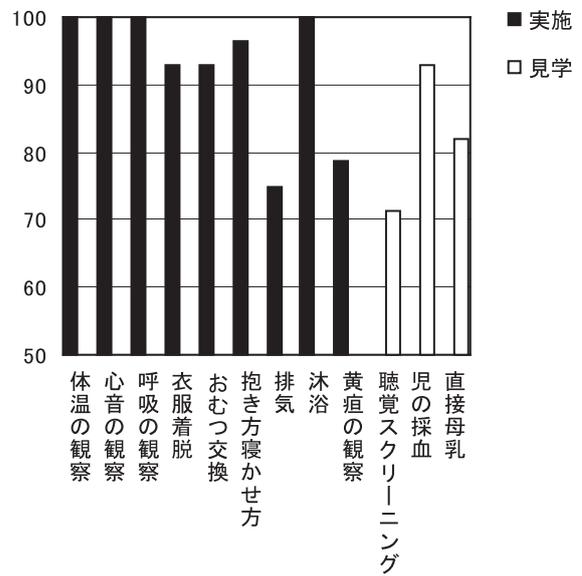


図14 A施設における新生児に関する技術項目

母性看護学実習の施設別にみた学生の母性看護技術経験の検討

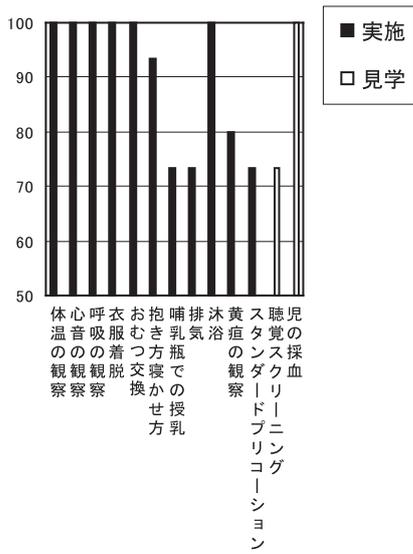


図15 B施設における新生児に関する技術項目

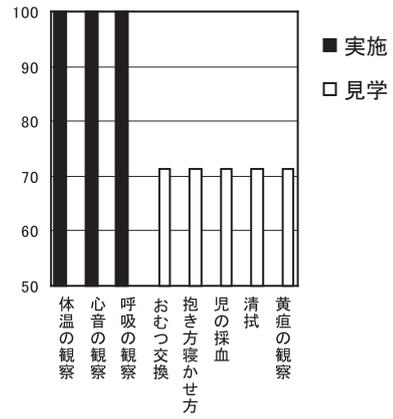


図17 D施設における新生児に関する技術項目

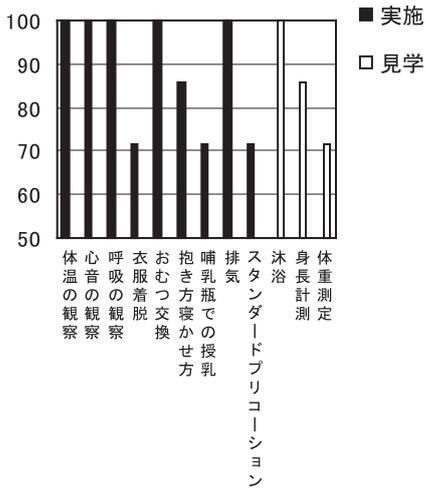


図16 C施設における新生児に関する技術項目